

日本古美術の「笑」がパリで一堂に会すユニークな展覧会 「笑いの日本美術史 縄文から19世紀まで」展



埴輪 盾持人 (埼玉県・前の山古墳出土)
(本庄市教育委員会)



布袋とお福図 白隠慧鶴

国際交流基金は、森美術館で2007年に開催され、30万人以上の入場者から好評を得た「日本美術が笑う」展を、フランス向けに再構築した展覧会をパリで開催いたします。会場のパリ日本文化会館は国際交流基金が管理、運営する文化施設で、パリ15区のエッフェル塔近くセーヌ河畔の一等地に位置し、総ガラス張りの地上6階、地下5階の建物は、日本が海外に保有する文化交流施設として最大級のものであります。

2012年は開館15周年にあたり、その記念事業として一年間にわたり「笑い」をテーマにした数々の事業が計画されています。本展はそのなかでも中核となる事業として計画されました。禅的な精神性、またはマンガ、ポップといったステレオタイプな面が強調される日本文化の受容傾向に対して、日本の古美術の中から「笑い」というユニークな表現を通して、日本美術そして日本の再発見の場となることが期待されます。

(本展は、国際交流基金設立40周年を記念する事業の一つです。)

会期 2012年10月3日(水)～12月15日(土)

会場 パリ日本文化会館 (展示ホール)

主催 国際交流基金、パリ日本文化会館、パリ日本文化会館支援協会

企画協力 森美術館

協力 日本航空株式会社

キュレーター: 広瀬麻美 (森美術館学芸部シニアコンサルタント)

アドバイザー: 山下裕二 (明治学院大学教授)

出品予定作品: 縄文時代の土偶、古墳時代の埴輪から、江戸時代を中心とした屏風、掛幅、浮世絵、仏像など約100点

海外における日本の古美術のイメージは、「わび」「さび」や禅的な精神性をおびたもの、また琳派や浮世絵のような現代にも通じるグラフィカルなものに代表され、「笑い」の要素を見出すのは難しいと思われがちではないでしょうか。しかし意外にも、古来より欧米や他のアジア地域とは違った「ユーモア」や「笑い」の文化が日本にはあります。この展覧会は、縄文時代から幕末・明治までの長い日本美術の歴史の中から、「笑い」というキーワードで作品を選出し、これまであまり知られることがなかった日本美術の新たな側面を検証するものです。

冒頭には、にっこり微笑む縄文時代の土偶、そして古墳時代の埴輪が並びます。埴輪の人物像という表情の乏しい顔を思い浮かべますが、実はその中のいくつかには、大笑いをしているプリミティブな造型の兵士や農夫の埴輪もあります。これらは高貴な人物の墓を守る意味で作られましたが、笑うという行為には外敵や邪鬼の進入を防ぐ力があると信じられていたからだと思われます。同じ目的で作られた中国の兵馬俑（紀元前2世紀）においては、深刻な表情が写実的に表現されているのとは実に対照的です。

動物を描いた作品の中にも、やさしい微笑みや風刺を含んだ笑いを見出すことができます。見ているものが思わずにっこり笑ってしまうほど、愛らしく描かれた動物たち。またある時は動物を擬人化することによって、様々な行事や出来事を再現し、表情豊かに、まるで言葉を発しているかのような表現もあります。人間ではなく動物に語らせることによって、ユーモアだけではなく鋭い風刺で、世相を批判する作品もあります。こうした動物を擬人化して表現する方法は日本独自のものです。

6世紀ごろ、中国大陸から、または朝鮮半島を経由して、本格的に日本に新しい美術がもたらされました。それらの大陸文化に強い影響を受けながらも、島国である日本ではユニークな造型が産み出されました。仏教が大陸から伝わる前から存在した日本の民間信仰と、笑いとの関係にも長い歴史があり、日本最古の歴史書である「古事記」に登場する日本創世の神話の中でも、笑いは重要な役割を果たしています。

また、仏像に限らず神仏に関する彫像や絵画に、笑いの要素を取り入れて表現したものがあるということも日本の宗教美術の特色のひとつです。西洋や中国でも、微笑んでいるような宗教的な聖像はあるものの、そこでは写実性や崇高さが第一義的に求められ、「笑い」そのものの要素は自ずから排除されます。また、日本では宗教者たちが、笑いを目的としてではなく、民衆への布教手段として使うこともありました。18世紀に活躍し、夥しい数の書画を民衆強化の材料として使った臨濟禅・中興の祖である白隠。そして内なる仏を木から彫り出した円空や木喰の仏像の中にも、慈悲深い微笑みや笑いをたたえるものが数多く遺されています。

本展は2007年に東京の森美術館で開催され、30万人以上の入場者から好評を得た「日本美術が笑う」展を再構築したものです。展示作品の4分の3はフランス向けに新たにセレクトされ、日本国内においても展示されたことがない、新発見作品も多数含まれます。縄文時代から幕末・明治時代までの日本美術における「笑い」を、土偶や埴輪などの古代遺物、肖像画、お伽草子などの絵巻物、庶民的大津絵や浮世絵、禅画、円空、木喰の仏像など約100点で構成します。

(森美術館 学芸部シニアコンサルタント 広瀬麻美)

展覧会の内容

1. 笑いのアーケオロジー：土偶、埴輪

驚くべきことに、日本では3000年から4000年ほど前に、おそらく笑いを表現した造型が産み出されています。縄文時代後期の人物をかたどった土製品、土偶です。これは世界的に見ても、もっとも早い例ではないでしょうか。土偶は、なんらかの呪術的な目的のためにつくられたもので、たしかに用途を確かめる術はありませんが、その豊かな表情を見れば、古代人が笑いによって邪気を払おうとしたのではないかと考えてみたくになります。

縄文時代に続く弥生時代、さらに古墳時代になると、明らかに笑いを意図した大胆な造型による人物像があらわれるようになります。

古代の出土品においてさえ、これほど豊かな表情が見られる日本美術。笑いの表現は、伏流水のように静かに流れて、以後の時代に受け継がれていくこととなります。



土偶（荻ノ平遺跡出土）
（栃木県教育委員会）

2. 笑いのシーン

6世紀半ばに朝鮮半島経由で日本へ仏教が伝わり、その後、中国の仏教美術が直接流入するようになります。しかし、日本人は中国的な技術を駆使した精巧な美術を受容しながらも、それをアレンジして、独自の美術へと変容させていきます。寒山拾得などの脱俗の聖人や、李白などの詩人にまつわる中国の逸話が伝わると、ユーモラスな表現を増幅して、積極的にキャラクター化していきました。

中世から近世にかけては、見る人が思わず笑ったり微笑んだりしてしまうようなストーリーが数多く作られ、「築嶋物語」のような、御伽草紙と呼ばれる素朴な絵入りの短編物語の画風は、アール・ブリュット風の稚拙味溢れる表現が特徴的です。17世紀以降、街道を行き交う人たちに安価な土産品として売られた大津絵にも、そのような系譜は受け継がれています。

江戸時代には、徳川幕府の鎖国政策により、結果として他の東アジア圏とはまったく異質な美術が花開くこととなりました。曾我蕭白、伊藤若冲ら江戸時代中期の奇想の画家たちは、ある時はグロテスクに、またある時は軽やかに「笑いのシーン」を画中に作り出したのです。江戸時代末期には世情や政治の不安定さを揶揄した浮世絵師、歌川国芳や、河鍋暁斎らによる戯画、風刺画は、庶民に絶大な人気を博しました。

一見、単純にかわいらしく滑稽に見える作品から、その成立の背景や元になった故事、また画中の賛や見立ての構造などを把握すれば、より深い笑いの表現を理解することができるのです。



百鬼夜行図屏風 河鍋暁斎
(福富太郎コレクション資料室)

3. いきものへの視線

「人間以外の動物も笑うのか」という永遠の問いがありますが、我々人間には動物が「笑っているかのようにみえることがある」ことは確かです。動物を擬人化することによって、何かを語らせ、笑いの効果を上げる試みは、すでに平安時代末(12世紀)から始まっていました。その手法は、森狙仙、曾我蕭白、長沢芦雪ら多くの18世紀京都の画家たちにも引き継がれ、彼らはいきものたちへ熱い視線を注ぎ、抜群のテクニックでユーモラスな動物画をうみ出しました。

動物たちの愛らしさや滑稽な動きをカムフラージュに使い、世情や政治への痛烈な批判精神を秘めた表現や、明らかに厳しい規制に対抗するかのようなパロディー作品もあります。しかしいずれの画家たちにも共通するのは、動物や昆虫、魚など「いきもの」への優しいまなざしと、深い愛情に満ちた表現です。



魚の心 歌川国芳



牛図 長沢芦雪

4. 神仏が笑う～江戸の庶民信仰

江戸時代に絶大な人気を博した七福神は日本の土着信仰、中国の仏教、道教、インドのヒンドゥー教の7つの神仏から成っています。元々は室町時代の水墨画にそれぞれ単独で登場した画題でしたが、江戸時代になって、7つの神仏がセットで描かれるようになりました。大らかな笑いを体現するこの神仏は、現在でも広く信仰されています。

江戸時代の宗教者たちは、笑いを表現した絵画を、布教の手段として使いました。臨済宗の中興の祖である禅僧・白隠は、七福神、その中でもとりわけ布袋を、白隠自身の分身（自画像）としてユーモア溢れる表現で大量に描き、禅の本質を説く役回りを果たさせています。白隠につづく時代の禅僧である仙厓も、仏の教えをユーモラスに、独自の軽い筆致で描いた多くの禅画を遺しました。

内なる仏を木から彫りだして形にした修行僧、円空と木喰が、その長く厳しい修行の中で彫り続けた膨大な仏像の中にも、慈悲深い穏やかな笑みを浮かべるものが多く含まれています。

宗教者が自ら笑いの表現に満ちあふれた絵画や彫刻を産み出し、民衆から大きな支持を得たという事実は、日本では、西洋における宗教と美術の関係とはまったく異なる様相を呈していたことを物語っているのです。



伏見人形図 伊藤若冲



踊る布袋 雪村
(板橋区立美術館)



玉津島大明神像 木喰
(河井寛次郎記念館)

展示に関するお問合せ

国際交流基金 森多恵/小林美帆子
文化事業部 欧州・中東・アフリカチーム
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1
Tel: 03-5369-6063 Fax: 03-5369-6038
www.jpf.go.jp

広報用画像・取材のお問合せ

TAIRAMASAKO PRESS OFFICE
平昌子
Tel: 090 - 1149 - 1111
info@tmpress.jp